

分間江戸大絵図(天明四年) 都立公文書館蔵

江戸川区の文化財史跡、昭和63年刊行

平井満右衛門が開発

平井新田跡

所在 東陽三、四、五、南砂二の一部

平井新田は、南は海に面し、砂村新田、深川木場町、石小田新田に囲まれて位置している。規模は、寛政二一年(一七九九)の検地によると、東西二〇町(約二八〇坪)、南北五町(約五四五坪)、江戸より一里余、民戸三三である。

明和二年(一七六五)、平井満右衛門という人物が新地の築立を企画し、六月二七日に洲崎弁天別当吉祥寺裏から防波堤のくい打ちを始め、一月二日、工事開始から半年足らずで約二〇万坪の埋立てが完成した。『葛西志』によれば、お堀の浚せつで出た土を使用し築立てたと伝えられている。西北の久右衛門町の一部を含め、開発者の名をとって平井新田と称された。

維新の後は二戸七六人が住み、米、大麦、胡瓜、茄子、葱などが栽培された。

明治二四年(一八九一)、北に接する石小田新田の一部を加え、深川区東平井町、西平井町、南葛飾郡砂村字平井となる。

海水を引いて塩をとる

平井新田塩浜跡

所在 東陽三、五の東部、四の西部

明和二年(一七六五)に築立てられた平井新田には、塩田が営まれた。「明和年中海岸図」、天明四年(一七八四)の「分間江戸大絵図」等の江戸図で、その位置や規模を確認することができる。後者の江戸図によれば、平井新田西部に位置し、「汐溜」と表示された四角い囲いが四個ほど並び、海から「汐引ホリ込」と表示された水路で海水を導いている様子が描かれている。そこには、「新田塩浜開発人平井満右衛門、(中略)此所ニテ三百坪余塩浜」とあり、平井新田を築いた平井満右衛門自身により三〇〇坪の塩浜が営まれたことが知られる。しかし、その後間もなく取り払われた。潮の便が悪く能率が悪かったため、また行徳からの苦情によるなどの理由があったようである。

しかし、塩浜という地名は残り、「平井新田字塩浜耕地」の呼称は、明治二四年(一八九一)この地域が深川区西平井町に編入されるまで続いた。

江戸への入口

なかがわなまき川船番所跡

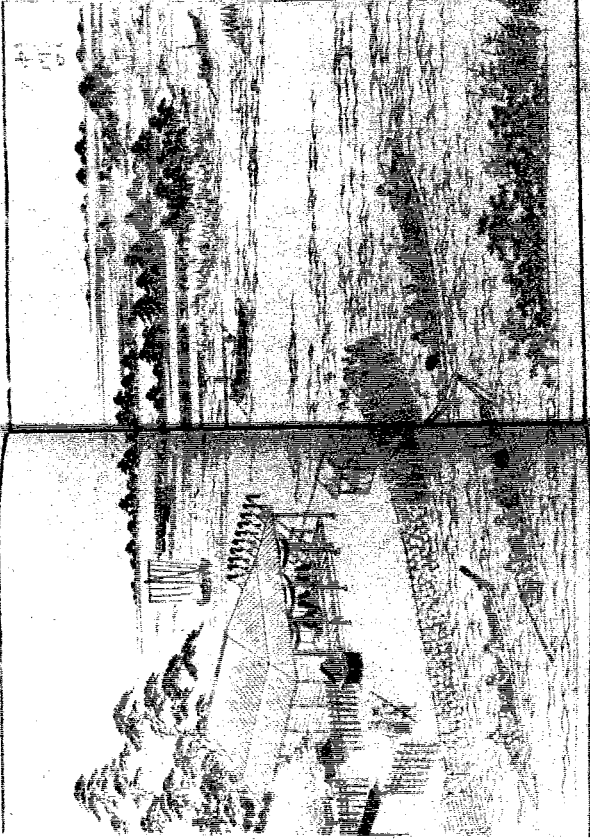
所在 大島九一一

中川船番所は、中川関所ともいわれ、小名木川の中川口北岸にあり、江戸と下総国(千葉県)行徳方面を結ぶ、通船改めの関所であった。広さは、東西二六間余(約四七m)、南北一七間余(約三二m)あった。

この関所は、幕府が江戸を防衛するうえで、ここを出入する船の取締が必要であったため設置された。

当初は、隅田川口の万年橋際にあったが、寛文元年(一六六一)六月本所の掘割の完成に伴い、中川口へ移ったが、その年代は不明な点が多い(一説には、延宝七年(一六七九)ともいわれる)。その後、貞享三年(一六八六)に、関所としての機構が確立し、五千石以上の旗本が就任した。

寛文元年の「定」によると、中川関所を通る際乗船の者は、笠や頭巾をとり、屋形船は中が見えるようにし、女性は、確かな証文があっても通行させなかったという。また、人が隠れていそうな持物や、不審な船は、止めて調べた。



江戸名所図会 芭蕉記念館蔵

江戸の文化財史跡 昭和63年刊行

行徳の塩を江戸へ

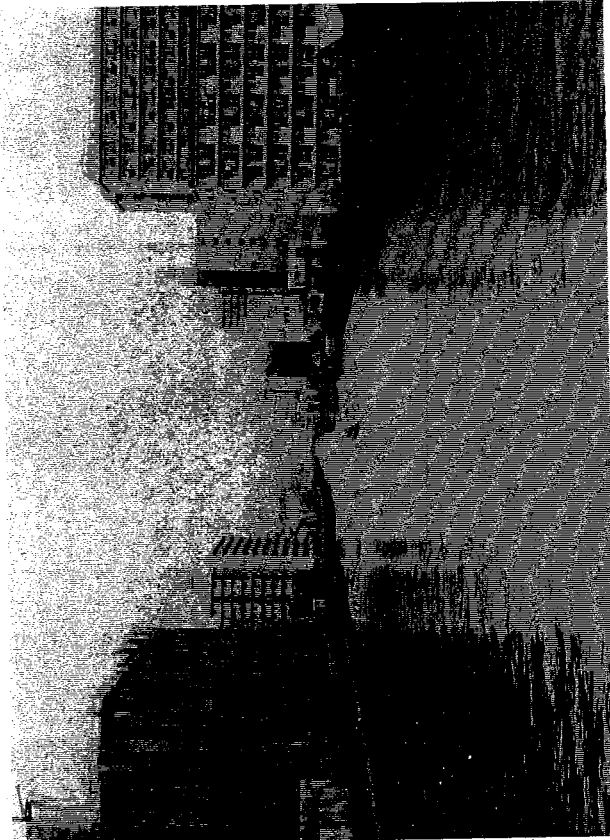
小名木川

所在 大島九一一(常盤一一一)

小名木川は旧中川から、隅田川に至る東西に流れる河川である。中川の対岸からは、船堀川、江戸川を通り利根川水系に至る。江戸時代から明治にかけて、鉄道網が整備されるまでは、江戸(東京)と、関東、東北を結ぶ、物資流通の重要な交通路として、深川の物資集散、取引、水運などの運輸業を盛んにした。

行徳の塩を運ぶために、天正一八年(一五九〇)ごろに開削されたと伝えられる。江戸時代の規模は、長さ一里二〇町(約五km)、幅は、中川口で一四間(約二五m)、隅田川口で一〇間(約三六m)であった。

江戸図に「うなぎさわ」「うなぎさや」とあり、この辺は鰻が名物で、鰻沢がおなぎ川に転じたといわれる。また、小名木四郎兵衛が掘ったのでその名をとった、とする説、古くは「をなぎ山谷」と称し、それが転訛したとする説などがある。



有形民俗文化財

六字名号供養塔

寛政九年在銘

所在 大島八十三八十三一 宝塔寺



門前の右側に建てられている。総高一五cm。石質は安山岩(小松石)である。形状は方錐角柱塔である。刻銘は次の通りである。

(正面)

高野山弘法大師

南無阿弥陀佛

(左側面)

信心の輩よろづ

病なんあひのかれ

七十二才 さつせん大徳(花押)

(右側面)

観譽顯明察善大徳

察譽顯松貞善法尼

(背面)

寛政九丁巳三月廿一日

背面上部には家紋(四ツ目結)、右側面上部には不動明王の種子(種子)が刻まれている。

この供養塔は、弘法大師の教えを諭し、厄除けのため日々信心するように建てられたものである。

(基礎部正面)

永

代

日

牌

関東区の文化財 有形文化財、有形民俗文化財の昭和61年刊行

有形民俗文化財

塩なめ地蔵

所在 大島八十三八十三一 宝塔寺



境内右側に六地藏と並んで安置されている。総高二五cm。石質は砂岩である。地蔵の表面全体が摩耗しており、塩が表面を薄くおおっている。

刻銘は全くなく、地蔵の頭、手足の凸凹がなくなっている。

もとは、小名木川沿いにあったものを、昭和初期に宝塔寺の門前(当時宝塔寺は南向きだったが、戦災で焼失し、現在は西向きになっている)に移し、戦後現在地に移した。戦前は、門前右側に塩なめ地蔵、はず向かいに六地藏があった。

この地蔵は、別名いぼ取地蔵とも呼ばれ、小名木川を通る商売繁昌を願う人や、いぼを取ってもらおうとする人々にでぎわったと伝えられている。昭和初期ごろまで、縁日なども行われ、かなりの人出があった。

小名木川の開削は慶長年間(一五九六〜一六一四)で、水上交通が盛んになってくるのは寛文(延宝)年間(一六六一〜一八〇)ごろであるため、この地蔵はおよそその時期に作られたものと思われる。

亀戸天神にも塩なめ地蔵があり、これも商売繁昌を願って作られたものである。